

□ 書評 □

Diana M. Bailey (著)
朝倉隆司 (監訳)

保健・医療のための研究法入門

—発想から発表まで—

半田健壽

(東北大学医学部附属病院中央リハビリテーション部)

かれこれ 30 年になるうか？ 東京の片田舎清瀬では、理学療法教育を専門学校から大学教育にするための運動、通称「4 年制運動」が展開されていた。世の中変わり、専門学校から短期大学へ、そして 4 年制大学、更に大学院での教育も受講可能なようになった。現在、これらの養成校は並存状態であり、いずれの学校でも知識・技術を伝承するための教育は共通して受けられる。では、大学・大学院教育に求められるのは何なのだ！ 一つに研究がある。研究活動を通じ、自ら研鑽し、知識・技術・倫理等を論理的に極めてゆくという行動様式を獲得する機会を与えられることが意味ある点である。

教育が充実するに従って、煌く研究成果もみうけるようになってきた。理学療法士学会の発表演題も 4 桁になろうとしているし、地方で開催される学会も含めれば 2,000 題に達するであろう。発表演題、いわば研究成果から捉えてみると、我が国の理学療法士の研究の特徴を幾つか垣間見ることができる。疑問点を日頃から持つことは多くの理学療法士が経験し、研究の必要性を強く感じ取っている。そのニーズや発想をあたため、デザインし、展開してゆく過程で今一步の「本心に惜しい」演題が多い。

外国で修士や博士を獲得された方の論文を拝見すると、指導教授の指導方法が素晴らしく優れており、我が国の現状とは隔世の感があり、日頃齒がゆい思いを

することがある。

本書は作業療法士で助教授をしておられる Diana M. Bailey が多くの作業療法士、理学療法士の協力を得ながら著した“Research for the Health Professional A Practical Guide(Second Edition)”の訳本である。東京学芸大学教育学部の朝倉隆司先生はじめ看護、作業療法等の 6 名の先生方が翻訳された。本書は保健・医療・看護の領域で研究を試みようとする方々を対象にしたガイドブック兼ワークブックであり、発想から発表まで研究過程に沿って、各段階ごとに全 13 章(項)にわたり、網羅して解説してある。また、Box というスペースを設定し多くの理学療法や作業療法の研究例も取り上げられ、具体的に読者に迫る。ワークシートは自分の研究を当てはめながら進めて行ける実践的・実用的側面を持っている。また、各項の後には引用文献の他に「さらに理解を深めるための文献」を紹介するなど最近の教育指導書にふさわしい内容を備えている。医学研究に関わる多くの著書の中でも実践的・教育的一貫性を持つ書は少なく本書は画期的である。

私に素晴らしいと言わしめた前述の論文は、このような各段階で指導を受け、まさに研究システムとしての存在と実態が立派な論文を完成させ、社会貢献できるのだという思いを更に深めるに至った。是非、研究に取り組もうとする方だけではなく、既に研究を実践なさっている方には研究の点検の目的で、更に本気で研究指導に当たられ充実を願う方には指導法の自己評価や方法の参考にお勧めしたい一冊である。

最後に欲を言えば翻訳に理学療法士が一人でも入っていれば良かったと思われる。

● A 4 変形判 頁 320 図 18 表 5 Box 約 130

2001 定価(本体 5,400 円+税) 〒 380

協同医書出版社・刊